

ニッポンのサムライたち

税理士

最近の若い方は、税理士にあまりいいイメージを持っていないように思います。中小・零細企業の社長を相手に申告業務を肩代わりしているのが安っぽく映るのでしょうか。その意味では、世界を相手にするという印象のある公認会計士のほうが現在のステータスは上といえるのかもしれませんが。

行政書士

行政書士を目指すにあたり、私は当時池袋にあった「ダイエックス」という資格取得の専門指導校に通いました。しかし、ただ学校に通えば行政書士になれるほど資格取得は甘い話ではありません。受験時にすでに**50代だった私は**専門用語がわからないという圧倒的に不利な状況を乗り越えるため、とにかく愚直なまでにテキストと向き合いました。当時私が手にしたのは学校から提供されるテキストと、それとは別に購入した5冊の参考書です。これらの教材は本当にボロボロになるまで読み込み、ひとつひとつの文字を自分の頭に刻み込んでいきました。そうやって条文などを読み解く術を得ると、最初は絶望するほど難しいと思われた試験問題なども楽しく咀嚼できるようになったのです。

正直な話をすると、行政書士はそれを得たからといって転職に役立つような資格ではありません。では独立・開業すれば儲かるかといえば、それも肯定できないのが現状なのです。多くの行政書士は資格取得後にすぐ事務所を開業するのではなく、まずは自宅を作業場所として地道に実績を積み重ね、どうにか軌道に乗ったと見極めがついたところで事務所をオープンします。

では、その**仕事が少ない雌伏の時代**をどうやって過ごすかといえば、行政書士会で知り合った仲間や先輩から案件を紹介してもらうのです。もちろん、自分自身に持ち込まれた相談で取り組むのが困難なものは、逆に知り合いに紹介することもあります。こうした人脈・ネットワーク作りをすることは行政書士の必須事項といえ、その一助となってくれる行政書士会の存在はないがしろにすることはできません。

社会保険労務士

しかし、社労士はこのように人気がある一方で、実態があまり理解されていない職業でもあります。異業種交流会などに参加して企業の社長などと話しても、「社労士とは何をするお仕事ですか？」といまだによく質問されます。これは、企業の経営に参画する人たちが人事・労務関連は自分たちの手でうまく切り盛りできると、思い込んでいる点もあるでしょう。企業への関与率が税理士は9割以上といわれますが、**社労士は3割程度**であるということからも明らかです。

税理士

税理士の仕事を定義として簡単に説明すると、税務書類の作成代理と税務相談ということになります。少し前であれば、個人や法人が確定申告を行う際の書類作成は必ず税理士に相談するというのが一般的でしたし、そうした書類作成の業務だけでも成り立つ仕事でした。

ところが今は、誰でも使える会計ソフトが普及していますし、パソコンを使えば情報収集も簡単にできます。**みなさんが必ずしも税理士に書類作成を依頼しなくなりました。**ですから今は、それにプラスαを加えたサービスをいかに提供できるかが重要になっています。一言で言えば、「お客様の求める結果に向けてリードしてゆく」ことが今は求められています。

一念発起してから、まず親に税理士になるということを伝え、資格勉強のための時間がほしいと頼み込みました。それから専門学校に通って勉強を開始したのです。1年中ほとんど毎日、学校に通っていました。授業がない日もあるのですが、**大学を卒業したのに家にいると、近所の目が気になってしまいます。**ですから、授業がない日にも朝から自習室にこもって、夜の10時ごろに追い出されるまで勉強を続けていました。

そのスタイルで勉強に専念したのが、**およそ3年間**です。その後、会計事務所で勤務しながら勉強を継続して、**2年後に試験に合格することができました**。もちろん苦労はしましたが、それまでの**22年間真面目に勉強してこなかったのですから、今やるしか仕方がいという思いで勉強していました**。

また、税理士試験は公認会計士試験などとは違い、科目合格制という制度を採っています。5科目すべてを一度に合格する必要はなく、1科目ずつ合格していき最終的にすべて合格できれば資格を取得できるという仕組みです。そのためか、税理士の場合は社会人になってから勉強を始めて合格する人もたくさんいます。

合格のコツについては、「他のみんなが正解する問題を落としてほならない」ということはまず守りたいところです。税理士試験はいわゆる「競争試験」ですから、一定の点数を取ればよいというわけではなく、受験者のうちである程度の1位に入らなければ合格できません。

土地家屋調査士

文系の方で土地家屋調査士を目指すという方がいますが、このケースではいきなり土地家屋調査士の試験を全部受けるよりも、一度測量士（補）の資格を取って測量試験を免除にする方がやりやすいと思います。

現実的に言うと、土地家屋士になる人の多くは建築士経験者と測量士（補）です。建築士の場合は職務内容を活かして資格をとりやすいですし、測量士（補）の場合は、私の事務所もそうなのですが、土地家屋調査士の仕事とセットで仕事することが多いので、併せて資格を取ってしまうという場合が多いのです。

公認会計士

公認会計士の主な仕事は、財務諸表の監査です。監査とは、企業の決算が正しいことを第三者の立場から証明することです。すべての会社が監査対象となるわけではなく、上場企業や一定規模以上の会社が監査の対象になることが、法で決められています。

できあがった決算書を閲覧して、一字一句正しいかを調べていくということも最終段階では必要なのですが、公認会計士は日ごろから担当企業を訪問し、いろいろな部署の担当者に質問をしたりして、帳簿の記録が企業の実態を表しているかを検証していきます。

これが大手監査法人に勤務する公認会計士の一般的な業務です。私も勤務していた時代のうち、上場支援の業務につくまでの約半分の期間はこのような仕事に主に従事していました。監査法人での仕事は、数字への鋭敏な感覚が求められることは当然ですが、かなりの**長時間重労働であり、精神的・肉体的にとっても厳しい業務**でした。

勤務時代には年収も気になりましたが、今は頓着していません。会社のお金と個人のお金、あわせてサポートさせていただく立場にいと、私の場合、個人の収入にこだわることにはあまり意味がないと感じています。「**仕事の報酬は、仕事**」という言葉の意味が、ようやくわかってきました。

独立して、もののありがたみが実感できるようになったのは大きな収穫です。勤務時代と同じようにご相談をいただいて、同じように解決し、報酬をいただいたとしても、組織の看板にではなく、私自身にご用命いただいたという喜びは、何物にも代えがたいものです。

これから公認会計士試験を受けようと考えている方にはまず、公認会計士の仕事について知っておいてほしいと思います。**公認会計士は、難関ながら離職者が多い資格**でもあります。期待と現実にギャップが生じないように、いろいろな人のケースを見聞きしておいたほうがよいと思います。これまで、私は資格にとっても助けられてきましたので、私自身は非常に値打ちのある資格だと思えます。

司法書士

従来、**司法書士は銀行や不動産業者に営業をかけ、仕事をもらってくるというスタイル**で仕事することが多かったのです。そのほか、会社設立の登記、役員変更の登記なども司法書士の基本的な仕事です。

ただ、こうした分野ではやはりベテランの司法書士が既にある程度顧客を獲得しているものなので、**若い司法書士がその分野に入っていくのはなかなか難しい**

ものがあります。ですから、比較的最近増えてきた相続の登記や、成年後見などの仕事が重要になってきています。

弁護士

弁護士もかつては初年に年収 700 万円程度が稼げる職業でした。しかし、現在は新人弁護士も大幅に増えて、弁護士の資格を取得しても法律事務所に就職できない、独立しようにも稼げる見込みが立たないという、厳しい稼業になっています。

中には弁護士の資格を取得してから一般企業に就職する人もいますが、弁護士資格に対して資格手当を支給してくれる企業は多くなく、普通のサラリーマンと変わらない弁護士もいます。

つまり、昔ながらの「弁護士は稼げる」というイメージで弁護士になろうとする人は、弁護士業界の実情を知ったらモチベーションを失ってしまいます。弁護士になれるような地頭の良さを持った人ならば、弁護士ではなくベンチャー企業の社長になったほうがよほど割がいいと思います。

弁理士

しかし、やはり弁理士でなければできない仕事もあります。たとえば鑑定、和解、実施許諾契約、裁判といった重要な法律業務がそれに当たります。今後のキャリアを考えたとき、やはり資格を取得しておくことは必要だと判断しました。

大手事務所に移ってから妻と結婚をしたのですが、プロポーズの際結婚十七か条を彼女に渡しました。その中に、「2年以内に弁理士資格を取る」と書きましたので、ここから本格的に勉強を始めました。事務所での業務をこなすかわら、受験機関のゼミに通って勉強に励みました。

当時の弁理士試験は8科目で、すべて3時間の論文試験です。合格率3%弱というかなりの難関でしたが、4年目に合格しました。心の励みとなったのは「必ず資格を取る」という妻との約束でした。約束よりは少し遅くなってしまいましたが、やはりほっとしました。

弁護士

私が弁護士を目指したのは、中学2年生のときに起きた事故がきっかけです。家族で卓球をしていたときに、球がブドウ棚に乗ってしまい、父はその球を取ろうとしてバランスを崩して転倒して、コンクリートに頭を強打したのです。

救急車を呼んで搬送すれば助かるのではと思いましたが、そうはなりません。搬送先の病院で3時間以上も放置され、また当時は珍しくなかった造影剤投与のミスも重なって死亡したのです。

この後の病院側の対応はさらに酷く、何も知らない母に、書面にサインをさせて証拠隠滅を謀ったと聞きました。私は中学生にすぎませんから何もできません。テレビで「白い巨塔」を見て、医療事故が起きたときは弁護士に依頼して証拠保全を図ったり、訴訟を提起したりすることができることを知ったくらいです。

病院側のいい加減な対応や、汚い手口に直面して、私は医者か弁護士になろうと決意しました。母親の手一つで育てられて中央大学法学部に進み、10度の司法試験を受けて32歳のときに合格。34歳で弁護士になれました。高校卒業後に医者でなく弁護士を選んだのは、同様の経験をした人びとの力になって被害回復を図ったり、病院側の改善を求めていったほうが、より広く社会の役に立てると考えたからです。